

日の際、その要請に従って10億円の政府援助を約束しました。お陰でモンゴル政府は干し草の買い上げを早期にすませ、1月5日零下43度の戸外で日本政府による100台の干し草援助トラック隊の出発式が行われました。

今冬のゾドは厳しく国連UNDPより日本の援助を踏まえた上で追加援助要請があり、本年2月エンフバヤル首相訪日の際、3万トウグリクの追加政府援助を約束しました。これにより、ゾド被害の大きい110郡に無線通信機材を供給することになりました。大草原の猛吹雪のなか、一家の主人は家畜を追ってさまよい、妻は老人・乳飲み子をかかえ、子供たちは遠く学校の寄宿舎にいるという孤立のなかで牧民は疲労困憊しています。通信手段があれば彼らは県中央に援助物資が到着したことを知り得ます。まことに残念なことに国連UNDPの主催したゾド地域視察で西部国境地帯のオブス県マルチン群で視察のヘリコプターが1月14日に墜落し、NHKの記者とカメラマンが尊い犠牲となりました。3月の吹雪でも同郡の9名の方が、吹雪のなか家畜を追って亡くなりました。もし通信機があれば或いは、との感を免れません。(モンゴル大使)

国際記者・加藤高広君を悼む

学長 中嶋嶺雄 (C昭35)

2001年1月14日、モンゴルを襲った雪害調査のための国連調査団一行の9名がヘリコプター事故で犠牲になった。そのなかにもまさか加藤高広君 (C平2) がいるなんて、私は新聞記事を読み入るように見つめねばならなかった。加藤君は、そんなかたちで殉職するには、まだあまりにも若い。NHKの国際報道記者として、あの抜群の語学力と鋭い取材感覚によって前途洋々たる活躍が期待されていただけに、あまりにも口惜しい。現に一緒に事故死されたNHKカメラマン正木実氏との合同追悼式で映し出された、朱鎔基中国首相の記者会見で加藤君が得意の中国語で鋭い質問をしている姿は、実に立派なものであった。

NHK北京総局に駐在していた加藤君は、私が一昨年初冬に北京を訪問したとき、私のもう

一人の教え子の朝日新聞の加藤千洋北京総局長と一緒にホテルへ来てくれ、会食後には優雅な茶房にも案内してくれた。若き未亡人恵子さんも本学の卒業生 (R平5) である。加藤君のような存在こそ、本学が養成を目指すべき目標でもあるだけに、ここに学長として、33歳というあまりにも早い死を悼み、謹んでご冥福をお祈りいたします。

河村功先輩 (S昭6) を偲んで

鈴木洪三 (S昭26)

我がスペイン語科の最長老であり長年東京外語会に尽くされた河村功先輩が春爛漫の4月8日に逝去されました。享年93歳でした。葬儀は故人ゆかりの下井草カトリック教会で執り行われました。

昨年暮れに風邪を患って以来食欲がなくなり、好きな外出もままならず自宅療養中のところ、3月4日に突然吐血され急速荻窪病院に入院されたということです。診察の結果進行性胃癌の末期と判明、併し年齢が年齢なので手術は行われませんでした。

私も4月初めお見舞いに伺いましたが、苦しさを訴えることもなく、何時ものように外語会やエスパニア会、FLS会などのことを熱っぽく語り、私を驚かせました。また臨終間際に先輩が発した最後のことばは「arriba (上に)」というスペイン語だった由。恐らく既に天上にいる奥様や友人のことを指したものと思われませんが、最後の最後までスペイン語を忘れなかった河村先輩らしい挿話といえましょう。

河村先輩とのお付き合いは十数年前、笠井鎮夫先生の追悼集作成のお手伝いをして以来です。河村氏はそれ以前にも『東京外語スペイン語八十年史』、『同別冊』、『高橋正武先生追悼集』など母校スペイン語科の歴史を知る上で貴重な本を何冊も上梓しています。

熱心なあまり話が長くなり、時には皆から煙たがられもした先輩でもありましたがチロリアンハットを被り杖をついて何処へでも顔を出すあの姿はもう二度と見る事が出来ません。

心からご冥福をお祈りします。

当時「語学の職人になるな」の標語に若者の知的虚栄心をくすぐられた覚えがある。しかし、職人とはつまりプロだ。職人と呼ばれて口惜しがる前に、呼ばれる資格の有無を問いただしてみよう。職人に甘んじない心意気は結構だが、それは職人になった上での話である。

ここでいう職人＝プロはもちろん単に外国語を生業とする者のことではない。敢えて私なりに定義すれば、それは「外国語を標準的な教養をもつネイティブスピーカーにある程度近いレベルで使える能力の持ち主」である。外国との交流が公私ともに複雑の度を増し、相互の利害が錯綜するなかで、国はこのような人材層の充実に国益の観点から推進しなければならない。国民がこの機能の中核を国立外国語大学に求めるのは当然である。

しからば、東外大の卒業生はプロの要件を満たしてきたであろうか。答えは関係者それぞれのご判断にお任せする。古橋さんも「語学能力の習得は絶対条件」と念を押されている。問題は求められる能力のスタンダードにある。徹底的習得とは具体的に何か。それと改名論の根拠をなす総合的カリキュラム拡充構想とは所定年限の枠内で両立するのか。今のところ世間は東外大に「専門語学において他大学に卓越したプロ（少なくともプロの卵）」の供給を期待している。大学はこの期待にどう応えるのか、換言すれば自学の「製品」に保証すべき語学力の水準をどこに置くのか、原点に戻って見直す時期が来ているようだ。

本学は語学プロ養成の場ではないとする立場も勿論あり得る。しかし、国立大学である以上、そうであればスポンサーたる国民に対して意のあるところを改めて訴え、東外大（もしくはその「脱外語」的後身）の存在意義について新しいコンセンサスを確立すべきであろう。これは府中新キャンパスの偉容を前に一市民として抱いた感想でもある。

本文はもっぱら英米科出身者としての個人的知見に基づいている。英語以外の言語に関しては認識不足を予めお断りしておく。

モンゴルの雪害

花田磨公 (M昭38)

モンゴルの雪害はゾドといわれ、家畜が雪を掘って餌を食べられなくなった状態をいいます。モンゴルには3300万頭の家畜（ラクダ、馬、牛、山羊、羊）がおり、ゾドになると200～300万頭の家畜が死にます。昨年の冬は280万頭の家畜が死にました。5月1日現在、今冬の家畜死亡数は210万頭で、前年より被害が軽くすみました。（日本の早期の援助のお陰で被害が少なかったと感謝されています）。

家畜死亡は、90年代私有化以後牧畜業に参入した、経験のない牧民や、家畜保有頭数が少ない貧牧民に被害が大きいのが問題で、彼らは離牧しようとさえ考えております。原因には気象異常等の問題がありますが、人為的な問題があることも否認しません。かつて全国くまなくいた獣医が民営化後いなくなり、家畜の健康をチェックできなくなって感染症にかかりやすくなったのと、病気の家畜が増加し、これがゾドで死亡しています。死んだ家畜の皮を剥くと臭いそうで、これが病気にかかっている証拠。また、井戸の管理人が民営化後いなくなり、家畜の飲料水不足を来して家畜の体力を弱めています。

昨年のゾドの際には当時のアマルジャルガル首相に同行して吹雪の夜中に強行軍し、あわや遭難の目に遭いながらゴビ地方を視察し、現場で牧民の修羅場を見ました。農次官とともにその記録を首っ引きで調べて各被害地の援助額を決め、これが政府援助に結実しました。干し草1ボードル（16キロのキュービック）700～800トゥグリクが相場ですが、ゾドでは1200～1500に値上がりします。2000を超えるとの私の説に農次官は同意せず、結局1900で計算し援助しました（実際には2300まで値上がりしました）。援助は3月にやっと間に合いましたが、民間の方の好意や各国の援助は草がすでに生えた5月以降となってしまいました。

昨夏干害となり、冬にはゾド必至との予報が出され、昨年の教訓と越冬準備は夏からとの常識に従い、9月エルデネチヨローン外務大臣訪